

水と文学 (7)



前東京都水道局理事 小泉 智和

昭和23年6月13日、太宰治と若き戦争未亡人の山崎富栄とが玉川上水に入水自殺しました。折りからの大雨で、流れが速く又水嵩も増していたので、発見は、1週間後の6月19日でした。奇しくも太宰39歳の誕生日の日でした。

衝撃的な事件で、玉川上水は、一躍全国的に有名になりました。

当時、東京都民でさえ、その多くの人には玉川上水がどこに流れているかは知らなかったのです。

今日、全国的に見れば、玉川上水と言えば、太宰治と答える人が多いのではないかと思います。

死の直前、「人間失格」、「桜桃」、「グッドバイ」を書いて、そして逝った太宰とはどんな人だったのでしょ。遠い津軽から、三鷹に来るまでの足取りを追って見てみましょう。

○ 太宰年譜

太宰治、本名津島修治は明治42年(1909)、青森県北津軽郡金木(かなぎ)村で、6男・10人兄妹の末っ子として生まれました。津島家は、県下有数の大地主で、父親は貴族院(多額納税者)議員をしていました。

生家は、1階11室278坪、2階8室116



太宰治 (撮影 田村 茂氏)

坪の豪邸です。尤も、太宰は、ただでかいだけの家や昔気質の家に愛着を感じていませんでした。彼は、地主の家に生まれた事に罪の意識を抱き、反対に民衆に対しは愛と感傷を抱いていたのです。

豪邸は、戦後津島家が手放し、旅館「斜陽館」となりましたが、現在は、「金木町太宰治記念館「斜陽館。」」となっています。

14歳で、県立青森中学校入学しますが、16歳の頃から校友誌や同人誌に小説やエッセイを發表し、ひそかに作家になる願望を抱きはじめます。

18歳で、弘前高等学校に入学、この年、青森の芸妓小山初代と知り合います。

20歳の時、思想的な悩みから、カルモチン自殺を図ります。

昭和5年(21歳)、東京帝国大学仏文科に入学しますが、共産党の非合法活動に関係します。この年、銀座のカフェーの女給田部シメ子と鎌倉の海岸で投身し、女だけが死亡したため、自殺幫助罪に問われました(起訴猶予で終わりました)。

22歳で、小山初代と所帯を持ちますが、偽名を使い、居所を転々として、非合法活動を続けます。しかし、23歳の時、長兄に伴われて青森警察署に自首

し、活動から離れました。

24歳、杉並区に転居、太宰治のペンネームを使うようになります。

26歳、鎌倉八幡宮裏山で、縊死を計るが失敗。また、この年、盲腸炎から腹膜炎を併発し、この時使用した鎮痛薬で、パピナル中毒となります。療養のため、1年ほど千葉県の船橋で生活しています。「逆行」をもって第1回芥川賞候補に推薦されましたが次席にとどまりました。(受賞は石川達三の「蒼氓(そうぼう)」でした。)

28歳、小山初代と水上温泉に行き、カルモチンによる心中を計りますが失敗に終わります。その後、初代とは協議離婚します。

30歳、井伏鱒二夫妻の媒酌により、石原美知子と結婚。三鷹村に移り住み、一男二女を設けます。

昭和22年春、入水自殺する山崎富栄と知り合います。秋、「斜陽」のモデル太田静子との間に女兒が誕生しています。

戦争で甲府・金木へ疎開した間(彼は、胸部疾患の理由で、文士徴用令を免除されていました)を除いて、昭和23年、39歳で命を絶つまで三鷹で生活を続けました。

○ 玉川上水と太宰

三鷹の町では、彼は和服の上に黒マントを羽織って、飲み屋や風呂屋に出かけ、酒屋ではウイスキーを毎度買って、和服の袂にひょいと入れて帰ったと言います。

黒マント姿で街を歩く太宰は、町の人に強い印象を与えていましたが、多くの人は、彼が有名な作家だとは亡くなるまで知らなかったそうです。

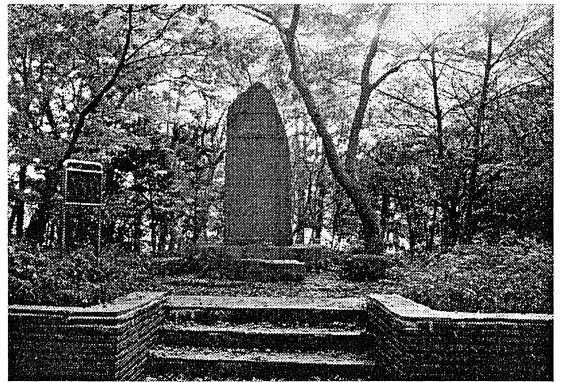
彼は、新宿や銀座で飲んだ後、作家仲間や編集社の人たちを三鷹まで引き連れてきました。そして、初めて来た人には、必ず、玉川上水沿いにある「松本訓導殉難碑」を案内したと言います。

遠足に来て、玉川上水に落ちた児童を助けるため、我が身の危険を省みず飛び込み溺れ死んだ松本先生を讃る碑です。恐らく、彼の自己犠牲の精神とがマッチしたので、案内したのでしょう。

玉川上水については、彼は、「乞食学生」のなかで、「頭を挙げて見ると、玉川上水は深くゆるゆると流れて、兩岸の桜は、もう葉桜になって真青に茂り合い、青い枝葉が両側から覆いかぶさり、青葉のトンネルのやうである。ひっそり

としている。ああこんな小説が書きたい。こんな作品がいいのだ」と語り、「この川の水は、東京市の水道に使用されているんだ。清浄にして置かなくちゃ、いけない」と言います。

そんな彼は、玉川上水の流れを見て、いつか死ぬならここがいいと、早くから死に場所に決めていた様に思います。



松本訓導殉難碑

○ 桜桃忌と白百合忌

生前、太宰は「花吹雪」の中で、「近くの禅林寺に行ってみる。この寺の裏には、森鷗外の墓がある。どういうわけで、鷗外の墓がこんな東京府下の三鷹町にあるのか、私にはわからない。けれども、この墓所は清潔で、鷗外の文章の片影がある。私の汚い骨もこんな綺麗な墓地の片隅に埋められたら、死後の救いがあるかもしれないと、ひそかに甘い空想を

した日も無いではなかったが、今はもう、気持ちが萎縮してしまって、そんな空想など雲散霧消した」と記しています。

口癖のように、「死んだら鷗外の墓の近くに葬って欲しい」と言っていた夫の気持ちを汲んで、美知子夫人が寺に頼み、鷗外の墓の前に太宰の墓を建てました。

寺側が、先代住職の墓を移し、没後1年後に建てました。その時、太宰と直接親交のあった人たちが集まり偲ぶ会が開かれ、会は「桜桃忌」と名付けられました。

「桜桃」は、死の直前の名作の題名で、6月頃太宰の生まれ故郷津軽に赤い実を付けます。発足当時の会は、何がなくてもサクラノボをつまみながら酒を酌み交わす偲ぶ会だったのです。然しして、今日、三鷹と金木の「桜桃忌」（金木は「生誕祭」と名を変えた）には、全国から多くの太宰文学ファンが訪れ、すっかり様変わりしています。



太宰治の墓・禅林寺

一方、太宰と彼を愛し支えた女性達を供養する集いが、昭和30年代後半から「白百合忌」として開かれています。

太宰年譜に書いたように、太宰は何度も自殺を試み、又多くの女性遍歴があります。

彼女達を引き付けて止まない、又今日に至るも多くの女性を引き付ける彼の魅力は何なのでしょう。

太宰との長い知り合いであった、桜井浜江さん（画家・「饗応夫人」のモデル）は、「ずっと、律儀な人だと思っていた。無頼漢みたいに言う人も多いけど、自分を痛めつけても、人を傷つけるということはない。人を思いやっている感じがする」と語っています。

太宰を飲み込んだ玉川上水は、当時、人の背を超える深さがあり、流れも速く、人喰い川と言われていました。その上水も今では、膝下ほどの深さしかなく、緩やかな流れを見せています。

流れに身を任す、太宰は、「人間失格」の中で「いまは自分には幸せも不幸もありません。ただ一さいは過ぎて行きます」と述べるのみです。